

腐った血

下之森茂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ゾンビ vs ヴァンパイア』

本報告書は、太平洋側で蔓延する疫病

『ゾンビ』に対抗しうる亜人種、
『ヴァンパイア』の行動を調査し

結果をまとめたものです。

但し調査対象に確証は一切ありませんので、
通例の従い秘匿化処理を行つてください。

1990年2月 特殊作戦セクション・サービスZ

提出者 グラーヴ

※本作はフィクションです。

実在の人物や団体・地域・製品などとは
一切関係ありません。

※作中には差別等の表現が含まれていますが、
当時の時代背景や価値観を反映させたもので、
差別等を許容や助長するものではありません。
予めご理解の上、ご鑑賞ください。

他サイトでも重複掲載。

<https://shimonomori.art.blog/2021/07/16/rotten/>

※本作は横書き基準です。

1行23文字程度で改行しています。

目

次

戻ってきた男

閉ざされた部屋

腐った世界

26 12 1

戻ってきた男

1990年2月頭、フランス首都、パリ。

日付が変わった頃に男がアパートマンを出た。

中肉中背、フランスの成人男性に比べると

やや小柄に見えるシルエット。

黒色のパーカーのフードを深く被り、

その上には革ジャケットを羽織る。

両手を突っ込み、やや猫背で周囲を見回して歩く。

この男がイタリアから越してきて1ヶ月が経つた。

地中海性気候のイタリアに比べると当然寒いが、

夏場は短く涼しく、なにより不快な湿気がないのが

パリの特長だ、と男は周囲の仲間に述べていた。

パリには男の仲間が多い。

半島に比べ、異邦人でも商売がしやすい。
 マフィアどもに売り上げを奪われる心配もない。

イタリアはヨーロッパの虫垂だ。

男はイタリアを発つ前に、

ハワイで商売をしないかと誘われたが、

半島よりも暑すぎる気候の関係で断っている。

なによりパリには不法移民が多い。

フランスでは近年アフリカ移民が増加し、

黒色人種の姿が目立つようになった。

排他的な国民性は相変わらずだ。

男は遠く東の果ての島国から来た東洋人だつた。

10年ほど前まではこのパリに住んでいたので、

土地勘もあり歐州の言語や文化にも精通している。

近年はとみに東洋人の観光も増えて景気がよい。

パリは歪な円形の都市になつてゐる。

その東西には瘤のよう取り付いた森がある。

セーヌ川が街全体を横切るかたちで流れ、

街の中央にはノートルダム大聖堂のあるシテ島。
それとマリー・アントワネットを収容した、
コンシエルジュリー監獄かんごくがある。

ちなみに百年戦争時代、

イングランド領だつた1390年、

記録上パリ議会で最初の魔女を裁いたのは
グラン・シャトレと呼ばれる要塞の裁判所で、
コンシエルジュリー監獄の右岸にあり

いまはシャトレ広場という噴水公園になつてゐる。

1429年、イングランドからオルレアンを
解放したことで知られるジャンヌ・ダルクは、
パリから西に離れたセーヌ川の川下、ルーアンで
前述の魔女同様に生きたまま火炙りにされた。
こうしたムダ知識は観光客の知識欲を満たし、
相手の警戒心を解くのに役立つ。

パリの街の中心からほど近い西側の8区は
特に国外からの観光客が多い。

世界中で有名なブランド店が立ち並び、

3つの通りに囲まれた三角地帯は
ゴーランデングル・ドールとも呼ばれる。

通りのひとつ、街の中心から西へと伸びる

シャンゼリゼ大通りにはエトワール凱旋門がある。

あのナポレオン・ボナパルトが建造させ、

あのシャルル・ド・ゴールが凱旋門が開いた

あの凱旋門がいまでは国のシンボルになっている。

それらを目当てにする観光客は、

近くのお高いホテルに泊まる。

近くのついでにエッフェル塔にも登れる。

ホテルの宿泊費は5,000フラン—（約12.5万円）を

超えるが近辺では珍しくはない。

これでも安い方だ。

ふところ
懐の慎ましいバックパッカーたちは

決まって離れた街の北側、18区に泊まる。

それでも1泊400フラン—（約1万円）ほど。

男の住むアパルトマンも北の18区に位置する。

18区に目ぼしいものがない、というわけでもない。

18区の南側、標高130メートルにもなるモンマルトルと呼ばれる丘には寺院があり、

パリ市内を一望する景色が楽しめ

常に観光客で賑わっている。

ふもと麓には有名なキャバレー

『ムーラン・ルージュ』があり、

歓楽街が多く夜も賑やかである。

ただしこれは18区の南側での話だ。

この北側はと、目ぼしいものはなにもない。

強いて述べるとすれば、モンマルトルの丘から

北へと伸びる長い長い坂道と、

狭い狭い一方通行道路に敷き詰められた

路上駐車の列とドミノ列になるスクーター。

それから有色人種の移民たちと、

落書きに近いグラフィティが目立つ。

去年、ベルリンの壁崩壊が

世界中のテレビに取り上げられると、
その壁に描かれたグラフィティをマネて、

白色の建物があちこちキャンバスにされた。

18区は至るところにグラフィティが盛んに行われ、
黒人がレイシズム人種主義に対しメッセージを残した。

『白色』の景観は『黒色』で台無しになった。

それとは別に道路標識にも落書きされ
機能しないでは困るので、

侵食する有色人種たちに脅かされた
パリの街の治安も問題視されている。

それでも世界では冷戦がようやく終結し、
アパートヘイト撤廃の流れが起きはじめ、
色分けされない時代が訪れようとしていた。

とはいえる色人種である東洋人の男は、

10年前からここで生活に不便を感じてはいない。
むしろ便利になつたとさえ感じている。

フランスでは電話回線を情報端末に繋ぐ
ビデオテックスのミニテルが普及した。

ホテルやチケットの予約がミニテルで容易に行え、
通信料金と共に街のキオスクで手軽に支払える。
その裏では出会い系、アダルトサイトでも
利用され、新しい犯罪の隠れ蓑みのになつた。
犯罪率が高いほど、

男にとつて仕事はしやすい。

パリは絶好の土地だちだつた。

口内に溜たまつたった唾液だえきを飲み込む。

男の身体のどが、喉のどの渴かわきを訴えている。

街角に立つ客引きの娼婦が手招きをするが、
同業のシノギが多く足がつきやすい。

線路を越えた東側の19区や20区には

労働者系移民が多く暮らしている。

東端の20区では今年から治安維持が強化され、
移民狩りも行われているとウワサ話を耳にする。

しかし男の狙いは常にバツクパツカーであり、
高いリスクを犯してまで足を運ぶ気にもならない。

公園のベンチに腰掛け、

渴きを誤魔化そうと男は貧乏ゆすりを繰り返した。
飢渴に伴う苛立ちがピークを迎えたころ、

異様な赤が視界に入った。

酔っぱらつてフラフラと歩く黒髪の、

美味そうな女の後ろ姿だった。

その頃には理性が吹っ飛んでいたのか、
背後から忍び寄つて首筋を噛み付いた。

長く伸びた犬歯が牙となり皮膚を穿ち、
唇に滴る血を一気に吸い上げる。

男の特殊な唾液が女の痛覚を麻痺させ、
また過剰な出血を抑える効果があつた。

わずかな血でも身体が満たされるのを感じる。
こうして他人から血を吸う度に、

自分がヴァンパイアであることを自覚する。

それから男は女の身体を見下ろした。

ムームーと呼ばれる南国の民族衣装、赤色のワンピースを着た有色人種の女。

寒い冬のパリに、こんな寒々しい格好をした女が深夜に出歩くはずもない。

鼻を突く粘りついた異臭に気づいて、

舌にまとわりつく血の違和感に男は牙を抜いた。

血のあまりの不快さにえずくよりも先に、

突然まばゆい照明が男に浴びせられた。

真っ白な防護服に身を包んだ集団が銃口向けると、

男は驚き硬直し、無抵抗のまま暴動制圧用の固いシールドで勢いよく地面に押し倒された。

防護服の集団は、無言で男の両手両足を

背中側に回して結束バンドを使つて縛る。

牙を剥いた口には鉄の棒をねじ込み、

すぐ外せないよう顎と頭に革ベルトで固定する。

それから男に麻袋を被せて視界を奪い、

乱雑に車へ投げ込んだ。

暗闇のなかで少しでも声を漏らしたり

身動きひとつ取ろうものなら固い棒で殴られ、
男を乗せた車は長時間移動を続けた。

男は考える。

警察か、対立するグループによるものか、
つづもたせ 美人局による單なる拉致とも考えられた。

しかしあまりにも手際がよく、

異様な状況にどれも納得いく仮説にはならない。
そしてあのハワイ女はなんだつたのか。

車はひたすら左回りに移動していく、

移動時間も現在地もまつたく検討がつかない。

長時間の拘束で我慢ならずに車内で粗相したが、
無言のまま棒で殴られるだけで済んだ。

着いた先では鉄のイスに両手足を縛り付けられ、
腕に針が差し込まれたので男は呻いたが、
針が抜かれるとまた警棒で頭を殴られた。

やがて麻袋と猿ぐつわを解かれ、

なにもない大部屋に男ひとりが取り残された。
天井近くには横長に狭いガラス窓があるが、
カーテンがされていて様子は分からぬ。
出入口は分厚い鉄扉のひとつだけ。

待たされる間に2度目の排尿はいにようをした。
冷めきつて凍結寸前だつたジーンズが
一瞬だけ溶けて暖かくなつた。

尿の臭いが鼻を刺激する。

あのハワイ女のうりが脳裏のうりをよぎるが、
彼女は別のもつと不快な臭いだつた。

閉ざされた部屋

長い緊張が途切れ、男がうたた寝をした頃に、目の前のカーテンが開かれた。

メガネをした小柄の女が見下ろし、

合図ひとつで後ろのサングラス姿の大男が手元のスイッチを押した。

鉄の椅子に座っていた男の、
睾丸と肛門の間に電撃が走る。

激痛と絶叫の後で3度目の排尿。ただしくは失禁。

「おはよう。フジタくん。」

広い室内に響くスピーカーからの音声。

目の前の女が、フジタの名を呼んだ。

ただ、発音はよろしくない。

ガラスから見えるのは黒髪で黒縁メガネの女。

黒色のジャケットに黒色のインナーシャツ、

黒色のネクタイと全身黒ずくめでいかにも怪しい。

それと同じ格好でスキンヘッドの大男は、

天井に頭がつきそうなサイズで遠近感を狂わせる。

一見すると拷問部屋だが

ふたりの拷問官はガラスの向こうの部屋で、

死刑執行人よろしくイスに電気を流すのみ。

室内は空調がなく非常に寒いが、

フジタは緊張からか恐怖からか、

頭の毛穴が開いて汗を垂らした。

「…お嬢ちゃんは何者だ？」

「ここはどこだ？」

「俺をどうするつもりだ？」

「この場の不安を払い除け、

フジタは先に質問を浴びせた。

「日本人は質問が多いわね。

顔はレバノン人にも見えるけど。

私はテギュ、こつちはグラーヴよ。」

「婦女暴行の現行犯だ。」

「婦女？　あれは人間か？」

グラーヴと呼ばれた色眼鏡にスキンヘッドの
いかにも寡黙かもくそうな大男の言葉に、

フジタは眉間を歪ませた。

フジタの質問に、ガラスの向こうで
ふたりが顔を見合わせた。

ふたりの名前、テギュとグラーヴは
フランス語の発音記号を意味する偽名だ。
フジタは偽名を名乗るこの連中に、
自分が連れて来られた意味を再度考えた。

「あなた、ヴァンパイアのくせに

モノを知らないのね。」

「箱口かんこう令が敷かれているんだ。無理もない。」

「じゃあ、やつぱり。

あの女の血をわざと吸わせたのか、俺に。」

「あれは保健省の備品。」

歩く腐った死体。ゾンビ。

あんたが血を吸つた相手。」

「俺になんてもんを吸わせてんだ！」

チビ女！」

「グラーヴ。」

「痛え！」

死体の血を吸つたと知るや憤るフジタであつたが、
テギュの命令ひとつで股間に電撃が走る。

フジタは痛みにうつむいて、
しばらく口から唾液だえきを垂らす。

「私が話してゐる途中。

そういうえばヴァンパイアの汚い唾液だえきでも、

ゾンビに対して麻酔効果が機能するのかしら？」

「知らねえよ。

なんせゾンビ相手なんて初めてだから。

「こつちから質問はいいのか？」

「どうぞ。」

「アレが保健省つてことは、

あんたら國の人間か?」

「H—IVって知つてる?」

「俺の質問は? 痛いてえ!」

「はい、口答えしない。」

「⋮エイズくらい知つてる。ゲイの病氣だろ。ヤク中どもが感染しててやつだ。」

「そんな認識か。」

H—IV
ヒト免疫不全ウイルスの発見から

まだ数年しか経つていない。

フランスでは血友病患者にも

非加熱製剤による感染が拡大し、

権利や政治の問題で大騒ぎになつた。フジタが住んでいたイタリアでの

H—IVの感染経路は主に性感染、

ヘロイン中毒者によるシリンジ注入器使い回しと

それらの輸血、それから母子感染であつた。「ヴァンパイアにH—IV問題はないのか?」

「俺を知つてゐるなら、そういうことだ。」

ヴァンパイアは血液、母乳、精液、
脛分泌液に多く含まれる。

ヴァンパイアは血を栄養源にする怪物だが、
衝動で吸血行為に及ぶほど理性は乏しく

その数は年々減少傾向にある。

つまり感染してしまうと、

怪物どもはまともな医療を受けられず
野たれ死ぬことが多い。

偉そうな言い回しをしたフジタに、

グラーヴは3度目の電撃をお見舞いした。

「ちなみにアレは

HIVには感染していないわよ。」

「そりやありがたい。

フランスは人体実験でもしてゐるのか。」

「フヂタは自分がヒトのつもりでいるのね。」

テギュに揚げ足を取られてヴァンパイアは黙つた。

「世界各国でHIV撲滅の為に
ワクチンを研究している。

その副産物で開発されたのがあのゾンビ。」

「ワクチン打つて歩き回る死体になつたつて？」

「そうよ。日本で開発されたワクチン。

製薬先進国が作つたその特効薬は、

大豆と枯草菌でできているの。」

「枯草菌…？」

「納豆を作る菌よ。」

「そうか…。あの女から発した

足の指の間みたいな臭いの正体は

納豆だったのか…。」

食欲を失せさせる黒ずむ茶色や臭い、

糸を引くあの光景を思い出してフジタはえずく。

それとテギュの納豆の発音も気になる。

「日本人のくせに

納豆に妙な偏見持つてるわね。」

「イングランド育ちなんですね。」

「偉そうに言つてるけど、

結局ろくなもの食べてないじゃない。

まあいいわ。その特効薬はヒトの体温で繁殖し、

他のウイルスや菌を寄せ付けなくなる。

それと同時に呼気で簡単に空気感染する。」

「空気感染だつて？」

「呼気から大氣中に芽胞がほうを撒き散らすの。

暑さ寒さ、それから熱、乾燥にも強い菌。

それが納豆菌な豆ねいとを使つた迷惑なところね。

症状は眼瞼下垂がんけんかすい、血色不良、言語能力の喪失そうしつ、

それから歩行、平衡感覚の低下が顕著けんちょになる。

あとは指の壞疽えそ。脈拍数の異常。

認知機能の――。

「おいおい。」

「だから日本人には耐性があつたのよ。

納豆ねいとに耐性のない外国人が使うと

性欲の低下と勉強や労働などの意欲の減衰、
他者への依存、責任転嫁、自殺率の上昇……。
「そんなデタラメの承認がよく降りたもんだ。」

フジタの意見にテギュも、
グラーヴまでもうなずいた。

单一民族国家に等しい日本では、

新薬開発において人種や民族での

臨床結果をこれまで重視してこなかつた。

「問題なのが感染者は、

脳がまるで機能しなくなるのよ。

そして面倒なことに感染者を脳死として
認定するにも、法整備に時間がかかる。

国を相手取つて裁判にかけるのも同じ。

当然、人権問題もあつて親族の同意も必要ね。

感染力が高く会社、学校、家族間で

感染者数が爆発的に増える。一家心中も増えた。

それにチーズやワインなんかの、微生物が関わる

発酵産業も大きな打撃を受けてね。」

納豆菌の繁殖力を考えれば、

他の菌など勝ち目はない。

「最悪、人類は日本人以外ゾンビ化する。」

「だからハワイか。」

以前、フジタが仕事に誘われたハワイには
年間200万人を超える日本人観光客が訪れ、
ゾンビの最初の感染が拡大した。

日本人観光客の増えるパリも、

もはや対岸の火事とはいかない。

そして日本人を偽っていたフジタには、

ゾンビになつたハワイ人の女があてがわれた。

「それで俺が贖罪スケープゴートの山羊になつたわけか。」

「潜伏期間は18時間。」

「それで、どうしたら開放してくれるんだ?」

「すると思つてるの?」

「ヒトの良心に期待してるのでだ。」

あんたら、國の何者なんだ?」

「ああ、てつきり気づいてるものかと思つた。

対外治安總局、ご存知 D G S E の

運用部門^D及び研究部門^R、

リサーチ・サービス付属の作戦部^S、

特殊作戦セクション・サービス Z。」

「サービス Z? ゾンビの Z か?」

そんな都合のいい部署聞いたことがないぞ。

お国情報機関がなんで俺なんかをターゲットにしてんだ!」

「先週新設されたばかりだもの、普通知らなくて当然よ。

それにあんたは日本人でしょ?」

ゾンビに感染しても抗体があるんじやない?
ヴァンパイア相手なら昨今わざらわしい、人権問題にだつて発展しないし。」

「ユダヤ人を焼いたナチ党と同じことをする。

つがあ！」

「敗戦国同士、吠ほえてろ。」

フジタの過ぎた発言に、

グラーヴがスイツチを押した。

激痛に悶えるなか、

フジタはさらなる罵倒を思い浮かんだ。

フランスは第二次大戦で

ナチス・ドイツの侵攻に恐れてパリを明け渡し、

イギリスに逃げた亡命政権は

自由フランスを名乗る。

イギリスの手を借りてパリを取り返した、

シャルル・ド・ゴールが凱旋門をくぐった。

そして戦争終結後に、『四大戦勝国』を

ひとり主張している大間抜けがフランスであつた。

しかしフジタは度重なる電撃による

股間の痛みで唾液だえきが垂れ落ち、ろれつが回らず、

苦言くげんを呈する気力も失せていた。

「ボウフラ程度の価値もないヴァンパイアめ。」
目の前の人種差別主義者レディシストを睨みつけた。

「あなたの血から抗体ができたら、

開放も善処してあげるわ。」

「…開放？」そりや得意のギロチンか、

もしくは火炙あぶりの間違いじやないのか？」

「そんなことしたらあなた、

聖人になつちやうじやない。」

フジタはジャンヌ・ダルクほど純潔じゅんけつではないし、

当然ながら敬虔けいけんでもない。首を切り落とされたり、火炙あぶりにされではひとたまりもない。

ヴァンパイアはウイルスであつければ死ぬ。

銀、どころか鉛の銃弾で頭を撃たれれば死ぬし、心臓を杭で打たれてもやはり人間と同じく死ぬ。

「フランスに戻ってきたのが運の尽きだ。

異常性欲者の仲間め。」

今こうして捕まつて人体実験を受ける最中、

グラーヴの言い分はもつともだとフジタは思う。

10年近く前、パリに住む日本人留学生が友人を銃殺し、死姦して食べた事件があつた。

このセンセーショナルな事件は

世界中で取り上げられ、

ヨーロッパ在住のアジア人は差別され、襲撃を受けることもあつたという。

フジタはこの事件を機に

イタリアに河岸かわいを変えた。

だがイタリアの気候はフジタの肌に合わず、パリに戻つたことが彼の運の尽きだつた。

腐つた世界

自らの呼吸がやけに早く浅くなっている異変に
フジタは気づいた。

電撃を浴びすぎて体力が落ちたのではない。
体温が上がって頭が熱を発し思考が覚束ない。
おぼつかない。
尿で濡れた股間の冷たさよりも、

身体の内側から熱があふれ出して暑く感じる。
ガラスの向こうではふたりが、

別室から渡された資料を見て
なにやらやりとりをしている。

放置されるとフジタは妙な焦りを覚えた。

それからこの部屋に連れてこられたときに、
左腕から採血されていたことを

ほんやりと思い出した。

「どうして俺なんだ？」

ヴァンパイアは他にもいるだろ。

なんで俺なんだ…。」

熱で真っ赤になつた顔で

うわ言のように後悔を繰り返す。

「ルー・ガル^{人狼}ーって知つてる?

あんたたち亜人種はすべて、

私達が把握しているの。

人権意識が高まつたおかげで
外交利用できるもの。」

「お前は売血ブローカーだ。

我々が見逃す道理もない。」

ふたりの言葉にフジタは啞然^{あぜん}とした。

ヴァンパイアであるフジタの、

過去の犯罪行為はすべてかれらにバレていた。

横浜生まれではあるもののフジタは偽名で、

イングランドで育ち、欧州で半世紀近くにわたつて

同類のまともなヴァンパイアに向けて

採取した血を売つていた。

顧客の中には同類ではない特殊な人間もいたが、世界中が混乱していれば商売はしやすかつた。

ビデオテックス^V_T_Xのミニテルのおかげで、

フランス中の同類に売ることも可能となつた。

100年近く生きていて、

便利な世の中にもなつたと実感したばかりだつた。

「そんなに血が売りたければ、

中国の農村部にでも行くんだね。

あつちも既にマフィアのシマよ。」

その中国ではH.I.V.の国内での拡大を懸念して、血液製剤の輸入を禁止した。

中國国内の血友病患者たちは血液製剤を求め、貧しい農村部が血を売ることで

政府は綺麗な血液製剤の材料を得た。

そんな中、血霸一（売血ブローカー）が非合法に無秩序な採血を行い、汚れた血を広めるという

本末転倒な結果を生んだ。

さらには去年、『六四天安門事件』も起き、
自由な活動は制限されることとなつた。

「見逃してくれよ！ 頼む！」

叫び懇願するフジタであつたが、無慈悲にも
ガラスの向こうのカーテンは閉じられた。
フジタは熱を身体に溜め込み、

沈黙のままうなだれる。

濡ぬれた股間に自らの臭い唾液がこぼれ落ちた。

フジタの血から納豆菌は繁殖だえき
ほんしょくし、

白血球数の異常な増加は細菌感染症によるもので、
彼がゾンビ化する結果は火を見るよりも明らかだ。
グラーヴが拷問部屋の照明を落とす。

かれら対外治安総局、サービスZの仕事場は、
パリ市内の東端、20区にある本部の
地下深くに存在する。

「日本人でもヴァンパイアはダメだつたな。

アレはどうする。」

「ゾンビのままなら日本相手に交渉材料として使えるでしょ。珍しい日本人の感染者だし。

それに異常性欲者をふたりも出して、世界に恥を晒したくないでしょ。」

「なるほど。金になるな。」

「そういうこと。

日本人のヴァンパイアなんてどうせ上は信じないでしようし、報告書は適当にでつち上げといで。」「分かりました。いつもどおりに。」

テギュは笑つてみせるが、

ゾンビ問題はまだ解決していない。テギュとグラー・ヴのふたりは、フジタの経過を観察していたガラス窓の部屋を移動した。

大きな歩幅で歩くグラーヴの常に2歩前を、
小さな歩幅で小柄なテギュが足早に歩く。

「しかし上からはアレを

なんとかしろと言われているんだよね。

ゾンビは亜人種じやないのにさあ。

ビキニみたいにアメリカが核でも落としたほうが
手つ取り早いんじやないか？」

「まつたくだ。

しかし次の手を考えなければいかん。」

「私とお前の同類でも

抗体はできなかつたとなるとあとは——。」

ドワーフと巨人族のふたりが廊下を歩く。

テギュがメガネのレンズを拭きながら少し考えた。

「次はエルフにしようか。

長寿で野生の暮らしが長い連中だ。

納豆ナイトに耐性ぐらいあるでしょ。」

「それならボルドーか？」

グラーヴのエルフといえばボルドーという考えは、フランスでも有名なオベロン王に由来する。

「もう国内対象は、上から止められる。」

ベネルクスあたりからしょっぴきましょう。

100人いればひとりは抗体を持つてるでしょ。」

「当てずっぽうな。」

「上のやり方を真似するだけよ。」

「あまり派手にやり過ぎると、

保健省がいい顔しないぜ。」

「ははっ。」

あいつら血友病患者の事件薬害工イズ事件で、

それどころではなくなるさ。」

HIVの発見はアメリカの国立衛生研究所と
フランスのパストール研究所で政府を巻き込み、
どちらが先かを争っているところだ。

さらに今回のゾンビ騒動に世界中の政治家は、
山積する問題に頭を悩ませている。

「政治の腐敗が表面化するのも時間の問題か。

「いつもこいつも腐つてやがる。」

「ゾンビや人間は腐つても、

納豆^{ナトウ}は単なる発酵よ。」

「俺はどつちも食えないぜ。」

「そもそも人間は食い物じやないわ。

いや、私達にとつては人間は食い物か。

世の中腐つていてこそ、私達のような

亜人種が生きる上で必要な養分になるわね。」

グラーヴが鉄扉のガラス窓から

ゾンビになつたハワイ人の女を眺めた。

保健省からの借り物なので返却の必要がある。

ヴァンパイアなどという怪物に囁まれても、

相も変わらずふらふらと徘徊していた。

いわゆる脳の制限が解かれたせいもあり、

ゾンビはたくましい生命力を發揮する。

書類上はすでに死体にも関わらず。

抗体ができたあかつきには、ゾンビが不眠不休で働く未来も想定されている。それはグラーヴ個人のみならず

世界的にも望ましい未来ではない。

「しかし、俺たちサービス乙の立場も

すでに怪しいぜ。」

「いまさら100も200も変わらないさ。」

ふたりは別の小さな部屋に入った。

足元には1メートル四方の小さなガラス窓。

それを囲むように立ち、下を見つめる。

ふたりが見下ろすガラスの床のはるか下には、巨大な空間が広がり、中には20区で狩られた有色人種たちがゾンビとなつてうごめいている。「不法移民たちを魔女狩りで実験体にした

腐った上の尻拭いなんて、ツイてないわね。

「あいつも、私達も。」

(了)